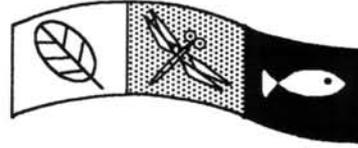


Rio



リオ ～豊田市矢作川研究所 月報～ No. 5



ナツズイセンの花 (1998年8月6日 田中 蕃 撮影)

*** 矢作川のさまざまな生き物 ***

アメリカシロヒトリ

間野隆裕

アメリカシロヒトリ *Hyphantria cunea* (Drury) は、その名のごとく北アメリカ原産の帰化生物でヒトリガ科に属する開張2.5cm～3.5cmの白い綺麗なガです。しかしその幼虫は、サクラ、バラ、クヌギなど100種類以上の樹木を食す毛虫で、しばしば害虫として嫌がられます。

本種は1945年の秋、東京都で発見されて以来次第に分布を広げ、愛知県内では少なくとも1951年頃より見られ、1950年代前半に蔓延しました。そのため5年間にわたって防除費補助金が農林省から交付され、防除の結果、撲滅に成功しています。その後県内では珍しい種類の一つでしたが、1980年代後半より、名古屋市、稲沢市、海部郡弥富町・美和町、西春日井郡新川町等で次々に見つかり、

最近では市街地で見つかることも珍しくなくなりました。矢作川河川敷でもヤマグワなどの樹木に幼虫が普通に見られるようになりました。日本では、年2世代の発生が普通と言われていましたが、近年埼玉県で年3世代の発生が報告されました。矢作川では5月と7月に成虫が記録され、おそらく8月下旬から9月にかけて3世代目の成虫が発生すると考えられます。一般に気温が高いと昆虫の成長が早くなることが知られていますので、アメリカシロヒトリが年3回発生するようになったことは、最近叫ばれている温暖化の影響とも考えられます。

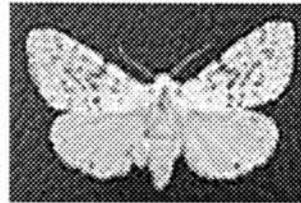
本種の雌成虫は数100個の卵を樹木の葉裏に生み、そこからふ化した幼虫は3齢までクモの巣のような糸を張って集団で生活し、その後分散して葉

を食べ大きくなります。老熟幼虫は食べる葉の量も多く、この頃一気に食害がひどくなり本種に気がつくことが多くなります。実際矢作川河川敷では食害のためほとんど丸坊主になっている樹木を時々見かけます。

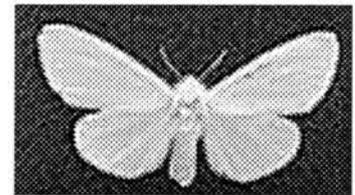
本種の駆除には幼虫への薬剤散布が一般的ですが、フェロモンによる駆除も考えられています。フェロモンとは体外に分泌され別の個体に何らかの影響を与える物質を言います。夜行性の本種では、暗闇の中雌成虫の分泌するフェロモンによって雄成虫が引き寄せられ、交尾することがわかっています。そこでこの雌成虫の分泌するフェロモンを人工的に合成し、それを野外において雄成虫を誘引、捕獲します。すると雄個体が少なくなり、雌は交尾できなくなり次世代の個体数が減少するというわけです。異国の地に定着し多くの樹木を食害するアメリカシロヒトリもしたたかですが、

それをさまざまな手段で防除する人間の知恵には驚かされます。

(まの たかひろ、愛知県立佐屋高等学校 教諭・豊田市矢作川研究所共同研究員)



アメリカシロヒトリ♂
1997.5.18
矢作川高橋産



アメリカシロヒトリ♀
1997.7.14
矢作川高橋産

～～～ 天然アユ調査会・河川視察報告 ～～～

水野 修

私たちは、さる7月31日～8月2日に、四国の高知県安田川および徳島県吉野川とその支流である穴吹川で、河川視察調査を実施しました。高知県内河川は、当初仁淀川ということでしたが、数日前の降雨で増水が著しく、急遽安田川に変更され、仁淀川について事前に勉強していたのに大変残念でした。

7月30日、PM3:00に矢作新報社前に集合。30分間の打ち合わせの後、参加者12名は3台の車に分乗し、一路大阪南港へ。ここからフェリーで一夜掛け、31日AM6:30に高知港に着岸。迎えにきていた矢作川筏下りの会の中田良政さん親子と合流し、安田川に向かいました。AM9:00に安田川漁協前に到着。すでに(株)西日本科学技術研究所の高橋勇夫さんが準備万端整えて待っていてくださり、大変恐縮でした。

早速川の状況などの説明をうけ、流域を案内していただいた。海に近いことを除けば、安田川は川幅、水量とも、矢作川支流の巴川に似ているように感じました。この川では、中学生以下の専用漁場があるそうです。矢作川でも同じことができないかと思いました。

アユ好きな人なら、川を見れば釣りに挑戦したくなるのが心情。午後の勉強会までの間この楽しみに時間を割くことにしました。PM3:00の納竿までに私の釣果は18～21cmが20尾でしたが、他の

メンバーもそれぞれに釣果があったようでした。

漁協事務所の研修室を借りて、高橋さんの真面目で含蓄に富む四万十川のアユの幼生期の生態に関する話がありました。昨年10～11月にふ化した仔魚は、海水温が高かったためほとんど死滅したと考えられること。1～2月生まれの子魚はシラス型の時代が短く、小さいままで遡上期を迎えるが、この遅生まれの個体は大量遡上しても、シーズン晩期にしか釣れないで、解禁当初は不漁で9月ごろから釣れ始めるらしいとのことでした。こうした傾向は近年多いのですが、どうやらエルニーニョ現象の影響ではないかと推察されるとの話し。しばし唖然としました。釣りの後の疲れを忘れ、みんな大層真剣に聴講していました。安田川漁協のご厚意に深く感謝します。

その夜は上流の馬路村に宿をとり、釣果のアユに舌鼓みを打ち、熟睡。

2日目(8月1日)、AM9:00に宿を立ち、徳島県吉野川へ移動。高知から高速道を通り、さらに一般道に出て祖谷溪を下る。有名な大歩危、小歩危の急流の美しい姿に一同感激しました。四国三郎・吉野川に設置された唯一のダム「池田ダム」を見学の後、この日の目的地穴吹川への到着予定時刻までの間、3時間足らずを吉野川の水に浸って調査することにしました。広大な河川敷に流れる水は、多分平水であったと思われます。けれど

も水量は豊富で、流れは決して緩くありません。河床の礫にはほとんど緑藻類がありません。竿を出した人は、数は少ないが大物のアユの引きに満足したようでした。私の釣果は24~25cmが3尾でした。

穴吹川は毎年8月第一日曜日に筏下りが行われると聞きましたが、巴川を少し小さくしたような川。しかし四国山脈の高峰剣山つるぎさんから流れる水は川底の小石が50m上から見える程の透明度で、四国随一の水質評価が良く理解できました。すでに翌日のために幾隻かの筏が出発点に準備されていました。筏というより、タイムレースに備えて船に近い形が多いように思えました。因みに、賞金は1位・15万円、2位・8万円、3位・5万円、その他飛び賞2万円。矢作川とは違った運営方法のようです。この日は筏下りの前夜祭で、村祭りのように多数の屋台が出ていて、花火大会も住民の方は楽しんだようでした。筏下りは、ここでは一種の村祭りなのでしょう。

3日目(8月2日)。スケジュールの最終日。3班に別れて行動しました。本年度筏下り全国サミット開催地・豊田から、来年開催地の穴吹町へバトンタッチの挨拶に行く人。穴吹川の調査、釣行の人。吉野川の調査、釣行の人。それぞれ11時までは自由行動。私は吉野川へ行きました。川幅、水量は、長良川とよく似ているように感じました。2時間で釣果2尾。11時穴吹町役場前に集合。陸路帰途につく。

途中話題の吉野川・第十堰を視察。250年前に当時の技術の粋を集めて造られた河口堰で、長さ500m、幅50mの規模。石組の上にコンクリートを流して造ってある。建設省ではこの堰を壊し、長良川河口堰と同形のものを作る予定らしい。長良川以上の反対運動が予測される。左岸に渡り第十堰の水門を見る。水流の速いコンクリートの底に、大量のカワシオグサが見られた。

PM3:00、徳島インターより大鳴門橋、明石海峡大橋を経てPM8:00ごろ全員無事帰着。ハードなスケジュールながら、大変有意義な視察調査会だと思いました。

(みずの おさむ、矢作川天然アユ調査会)



安田川漁協前での記念写真

——— 見つかったお地蔵さん ———

今井 利一

平成5年10月16日の出来事ですが、当時私は胸形神社の氏子総代をしていました。仲間と2人で神社にいる所へ見知らぬおばあさんが寄って来て「この川の付近に親子のお地蔵さんがあるはずだが知られないか」と尋ねられました。

どのようないわれのある地蔵か聞いてみると、昭和44年頃、矢作川が増水した時世をはかなんで入水自殺した親子の霊を慰めるため奉ったということでした。

川の付近を見れば竹・雑木・草がものすごく生い茂り地蔵さんを探すのは大変な事だと思いましたが聞いた以上は何とか探し出して、良い場所に安置しようと仲間と話し合い早速ナタ・カマ・ノコギリを両手に悪戦苦闘しながら探していると知らぬ間に川岸に出てしまいました。

汗を拭きながら休んでいると、この辺でよく友

と釣りや水泳をして遊んだ子供の頃を思い出しました。また、堤防から見る矢作川はそれはそれは自然で美しい眺めでした。

この中州一帯を整備したら素晴らしい公園になるだろうと仲間と話していると、突然川の方から「今井さんじゃーないかん」と声を掛けられました。見ると市役所にお勤めの村山氏が舟で近づいてこられ「最近この中州一帯は誰も手入れしないので荒れ放題になっているが惜しいことだ」と我々に話しかけてきました。

地蔵さんを探すのは小休止となり、時を忘れてこの荒れ放題になっている所をどのように整備すべきか話しこんでしまいました。

この事が縁で、村山氏が最大限協力していただける事になり、この中州一帯の整備方法について何度も話し合ったが、まず自分達で出来る所から

